



ポートランド州立大学 (PSU) ハットフィールド大学院 行政学部 学部長・教授
パブリック・サービス研究・実践センター副所長 西芝雅美さん
＜プロフィール＞

大阪大学文学部英語学科卒業。1991年に渡米。1998年にPSUのコミュニケーション学で修士号、2003年にPSUの行政・公共管理学で博士号を取得。専門は市民参加、米国地方政府研究、研究手法、多文化共生、異文化間コミュニケーション等。主な著者に『Culturally mindful communication: Essential skills for public and nonprofit professionals』、日英対訳『大学が地域の課題を解決する：ポートランド州立大学のコミュニティ・ベースド・ラーニングに学ぶ』等がある。

Program) プログラムについて簡単にお話しただけだと思います。

西芝：2004年に、東京財団主催で、PSUと早稲田大学の協働で市区町村職員研修プログラムが発足しました。全国の市区町村から市長推薦を受けた12〜13人ぐりの選りすぐりの中堅職員に早稲田大学の大学院で勉強してもらい、その後PSUで7週間の研修を受けるというプログラムでした。

2009年から、より多くの自治体職員の参加を図りたいという財団の意向で、早稲

田大学の部分を切り離して、「東京財団週末学校」と名称を変え、財団での約10回の講義と、ポートランドでの1週間の海外研修プログラムという形態になりました。

その後、2016年で財団の週末学校プログラムは打ち切りとなったため、2017年からはPSUが独自で提供する現在の人材育成プログラムJaLoGoMaを開催しています。この際、自治体の職員に限らず、まちづくりに関心のある人は誰でも参加できるようにしました。

近藤：ありがとうございます。

先日もそのプログラムに参加された方が福岡県内の自治体で町長さんになられて、JaLoGoMaで学んだことを生かしたまちづくりを実践されているというお話を伺いました。岩崎先生は、いかがでしょうか。

岩崎：私としてはポートランド州立大学が地域に対して学術的なノウハウを提供していることと、大学と市民との関係性が確立していることに驚きました。JaLoGoMaやCBL (コミュニティ・ベースド・ラーニング) のセミナーに参加し、まちづくりの手法を学べたことは成人学習の方法を考える上でもとても有益でした。

● 共生社会を実現する上でのまちづくりへ

近藤：JaLoGoMaの今年の夏のプログラムのポイントを教えてください。西芝：共生社会を実現する上でのまちづくりへの取り組み

コミュニティ・ベースド・ラーニング (CBL)

PSUがイノベティブな学習支援技法として採用しているのが、コミュニティ・ベースド・ラーニング。この教授法は学生と教員がコミュニティと積極的に関わり、学習プロセスの中でコミュニティの課題解決に携わる事で学びを確立することを目指すもの。

CBLの定義は「学問的な内容に対する学生の理解力と応用力を高めるために、系統だって学生が地域社会問題に取り組む講座。例として、CBLの機会が授業の一環として組み込まれている講座、フィールド体験学習 (実習「プラクティカム」や実務研修「インターンシップ」を含む)、キャップストーン、およびその他のコミュニティ・エンゲージメント・プロジェクトおよび研究プロジェクトなどが該当する」(Portland State University, 2021)

インタビュー

「地域の大人に社会課題を認識させ行動を起こさせるためには、どのような学習の仕掛けが必要か」

JaLoGoMaプログラム・ディレクター
ポートランド州立大学(PSU)
ハットフィールド大学院 行政学部 学部長・教授
パブリック・サービス研究・実践センター副所長 西芝雅美さんに聞く

聞き手：放送大学教授 岩崎久美子 本誌編集部 近藤真司 (オンライン取材 6月10日)

8月号では、「地域」コミュニティの持続可能性 地域と生涯活躍」を集めました。

その座談会の中で、パネリストのひとり、吉田敦也さん(ポートランド州立大学パブリック・サービス実践センターシニアフェロー・放送大学客員教授)が、全米1住みやすいまちとして世界の注目を集めてきたオレゴン州ポートランドの魅力を紹介していただきました。その後、たまたま、19年間行ってきた、住民主体のまちづくり人材育成プログラム「JaLoGoMa」を知る機会を得ました。

このまちづくり人材育成プログラムの魅力について、「JaLoGoMa」に参加の経験のある放送大学教授岩崎久美子さんに伺いました。そのプログラムの狙い、「共生」という言葉の持つ意味、さらに「大人の学び」との関係、どのように行動につなげていくか等、インタビューを行いました。(本誌編集長 近藤真司)

● まちづくり人材育成プログラム「JaLoGoMa」(ジャロゴマ)とは

近藤：まずポートランドのまちの魅力と、簡単にポートランドとのつながりをご紹介いただけますでしょうか。

西芝：ポートランドのまちの魅力は、ポートランドに住んでいる人たちが、長年こういうまちにしたいということを、明確に意思表示してきたことにその源があると思います。その想いの実現のための努力を積み重ねてきた結果、今、いろんな人に「ポートランドはいいまちだね」と言われるようになったのだと思います。

近藤：まさに、自分たちの住みたいまちを自分たちで関わりながらつくっていくということだと思えます。それでは、ポートランド州立大学(以下、PSU)のまちづくり人材育成プログラム「JaLoGoMa (Japanese Local Governance and Management Training

ポートランド州立大学 (PSU)

アメリカ北西部オレゴン州最大の都市、ポートランド市に立地する州立大学。

1990年代初等に「知識をもって市に貢献せよ」(Let Knowledge Serve the City)というモットーを採択。「地域に根ざした」大学を目指し、学習プログラムを提供し、住民主体の自治を推進し、行政を含む社会の改革に主体的に関わる人材育成のためイノベティブな学習支援技法を取り入れ、全米でもその取り組みは評価されている。

PSUは、キャリア支援、学び直しを目指す社会人教育の機会も多面的に提供している。また、ポートランドの持続可能なまちづくりが注目され、アメリカ国内や海外から持続可能なまちづくりの事例を学びたい訪問者をスタディツアーの形式で受け入れている。

JaLoGoMaの5つのキーポイント

- 1、住民主体となるまちづくりを行っていくための基本原則
- 2、自分の立ち位置からリーダーシップを取る要素
- 3、イノベティブ（革新的）な課題解決方法を見つけ出す
- 4、パートナーシップを組むためのスキル
- 5、「公正性」の視点をもってまちづくりを考える

方がどういうものなのかというところを今年のテーマに設定しました。ポートランドの事例も含めて包括的に考えるプログラムにしたいと思います。2020年に黒人のジョージ・フロイドさんが警察官の暴力で亡くなったということがきっかけとなり全米で人種問題に対してより一層関心が高まりました。ポートランドでもどうすれば人種も含めて、多様なバックグラウンドを持つ人たちがうまく共生し、恩恵を共有できる社会をつくり上げていけるかという事がまちづくりの中でも重要な課題として注目されています。

ポートランドでもまだ試行錯誤中ではあるのですが、その試行錯誤のプロセスも含めてポートランドで人種問題や、まちづくりをどうしているのか、あるいは人種だけではなく、障害者の人たちが健康者と共生できる社会をどのようにつくりあげようとしているのか、あるいはそういう目に見える違いを超えて、今まで声を出せなかった人たちの声をどのように吸い上げるのか、そういういろいろな大きな課題がいっぱいあります。そういう課題を中心にポートランドの方々に話を聞いて、日本から参加していただいた方々で、日本でのように共生社会を実現していけるのかを考える場にはしたいと思っています。

近藤・非常に大事な視点だと思います。日本はこれまで同質的な社会と感ずる人が多かったと思います。現実的にはかなり多様性というか、人種

まちづくり人材育成プログラム (Japanese Local Governance and Management (JaLoGoMa) Program) について

2004年に発足し2008年までは、東京財団主催でポートランド州立大学パブリック・サービス研究・実践センター (CPS) と、早稲田大学公共経営大学院の主管による「市区町村職員国内外研修プログラム」として開催。プログラム内容は早稲田大学公共経営大学院での講義受講と、7週間のポートランドでの体験学習からなる。

2009年から2016年は、東京財団主催の「東京財団週末学校」として開催。参加自治体職員数を大幅に増やし、東京財団での週末での講座受講とポートランドでの夏の1週間プログラムとなった。

東京財団が2016年でプログラムを打ち切り、その後、2017年からCPSが独自にまちづくり人材育成プログラム (Japanese Local Governance and Management (JaLoGoMa) Program) を開催。メインテーマを「住民主体のまちづくり」とし、自治体職員に限らずまちづくりに関心のある人が誰でも参加できるプログラムとして、毎夏、ポートランドでの1週間の滞在プログラムとして開催。

2020年にコロナ禍で、日本からポートランドへの移動が不可能となったため、プログラムをオンライン型のE-JaLoGoMaに切り替えて開催。参加者はオンラインのビデオ教材や文献資料で事前学習をし、セッション当日はオンライン上でポートランドの講師陣とリアルタイムでディスカッションをする形式で開催された。同年はセッション数全4回で60名が受講。翌2021年は同じくオンライン形式で、セッションを全3回で開催し、25名が受講した。

本年2022年は、7～8月にセッション数全4回で行われた。

2004年からこれまでのJaLoGoMa受講者は、500名を超える。

(参考資料：赤尾勝己・吉田敦也編著『生涯学習支援の理論と実践』(放送大学教材) 放送大学教育振興会 2022年)

の問題もそうですけれどもいろいろな課題があると思います。そこをどういうふうに考えていくかのヒントが、今の西芝先生のお話でもあったと思います。

JaLoGoMaで学べるまちづくりの5つのポイントは、①住民主体となるまちづくりを行っていくための基本原則、②自分の立ち位置からリーダーシップを取る要素、③イノベティブ（革新的）な課題解決方法を見つけ出す、④パー

トナーシップを組むためのスキル、⑤「公正性」の視点をもってまちづくりを考えるです。どれも非常に大事ですね。特に西芝先生がこのポイントというものがあれば、この5つの中からエッセンス的なことをお話しただければと思います。

● 誰もがリーダーになれる

西芝・共生社会と公正性にはオーバーラップがあります。ですので、今年のテーマは、この5つのテーマの中の公正性にフォーカスをします。

他の4つの点も全部大事なんですが、私たちのプログラムの中でぜひ皆さんに体感してもらいたいなと思っっているのが、誰もがそれぞれに自分の立場の中でリーダーになれる、主体性をもって、リーダーシップを取れるということです。

リーダーというのは、組織の中の立場も大事ですけど

それだけではない。皆さんそれぞれが、それぞれの立場で、学生さんであれば、学生という立場からどうやってリーダーシップを取れるのかということを考えてもらう。

あるいは役所の中でも、自分が入社したばかりだからリーダーシップは取れないというのではなくて、入社したばかりだから取れるリーダーシップがある。そういう考え方をディスカッションしながら、あるいはポートランドの方々のアプローチを見ながら、体で感じてもらうというのは、JaLoGoMaプログラムの中でもとても大事なポイントだと思います。

● 失敗することを恐れない土壌

近藤・それから私が気になっているのは、イノベティブなどところでは、課題解決方法を見い出すとき、イノベティブなものを出していかないと、従来の手法だけではうま

くないかないところもあると思います。③のイノベティブな課題解決方法、これについてはいかがでしょうか。

西芝・ポートランドの人たちはイノベティブだと言われています。なぜ、ポートランドの人たちがイノベティブなのかという点ですが、今までのJaLoGoMaに参加された方々のコメントを聞いていても思うのですが、失敗することを恐れない、あるいは失敗してもそれを周りがちゃんと受け入れる。失敗したから駄目ということではなくて、失敗するのは当たり前で、失敗するのは当たり前の土壌があつてこそ、イノベティブが生まれると思います。

失敗を恐れていたのではやっぱり従来の安全な方法しか取れなくなるので、ポートランドの人たちのやり方を皆さんに見ていただくと、失敗しても大丈夫だよというその辺の様子を分かってもらえるの



街中でのインタビュー

かなと思っっています。
近藤…非常に大事な部分だと思います。日本では出る杭は打たれるみたいなことがあるのですが、やっぱりそれを周りで支えていく土壌ですね。失敗ができる環境というのは非常に大事だと思っっています。

●パートナシップが重要

近藤…それから④番目のパートナーシップですね。これも日本の社会では難しいところですが、この辺のポイントがあればお願いします。
西芝…ポートランドのいろんな事例を紹介していく中で、どの事例にもいろんなパートナーシップがあるということになります。例えば、草の根レベルの住民グループが立ち上げたプロジェクトのプロセスを見ていると、彼らがいるんな行政と対等なパートナーとして話をする。お願いするのではなくて。あるいは大学をパートナーとして仲間に入

れる。そういういろんなパートナーシップを大事にしなごらまちづくりをやっているというプロセスが、こちらの事例では見られます。

JalGoMaのアメリカ人スタッフで、ずっと事例の紹介をやってもらっている方々もみんな、大事なものはパートナーシップだといいます。自分たちだけで何かをやると思っでもできるものではない。だから誰とパートナーシップを組むと自分たちのやりたいことができるのかを考える事が大事だと。その辺のアプローチをJalGoMaで、ぜひ皆さんに見てもらいたいと思っます。

近藤…パートナシップあるいはネットワーク型行政とか、連携をとるのがなかなかうまくいかない。それから住民と行政の関係でも、お願いに行くみたいなスタンスではなくて、基本的には対等だということ、行政職員の方も地

域に帰れば1人の住民であるという視点に戻って、いろんなことを進めていくのが大事だと思っます。

日本の大学は一部、大学開放、オープンユニバーシティもやっています。本格的に大学が地域の一員になっているところはあまりないような感じもします。

●Equity (公平性) と Equality (公平性) は違う

近藤…それでは、本日のインタビューのメインテーマである「地域の大人に社会課題を認識させ、行動を起こさせるためにはどのような学習の仕掛けが必要か」というところで、岩崎先生からお願いしたいと思っます。

岩崎…キーワードとして西芝先生が挙げられているEquityについてですが、アメリカではEquityは理念として文化的に教わるものと思っます。西芝先生が日本の社会を見たときに、

日本の社会が良くなるためにこのEquityという考え方や重要な理念を、私たちはどのような形で学んでいったらいいのでしょうか。

文化や価値観として大事だということとは分かっていても、日本ではEquityという言葉に対する具体的な行動は、学んできていないような気がします。例えばポートランドのやり方を日本の土壌に移し一般の市民たちに浸透させるためには、どのように日本の人たちの心にEquityの理念を根付かせていくことができるのでしょうか。

西芝…Equityの概念、公平性と公平性の違いがなかなか一般の人々には解りづらいというのはアメリカでも日本でも同じだと思っます。解りやすいのは公平性。誰をも対等に扱えばそれで公平、となる。行政は公のアプローチとして差別をせず、みんなを対等に扱わなきゃいけない、それが公平で正当なアプローチだとい

う考え方が一般的に浸透していると思っます。

それはアメリカでも同様ですが、少し立ち止まって考えて見ると、公平にサービスを提供すれば、お金持ちの人は既にメリットを受けている

のでさらに恩恵を被る。公平に貧しい地域に住む人たちもサービスを受けられるけれども、お金持ちの人たちが住んでいる地域と貧しい人たちが住んでいる地域の差は縮まらない。それが、本当にみんなが共生できる、みんなが楽しいと思えるまちなのかというと、そうではない。格差をどうやって埋めるのかということ、そこを考えたなら、行政のサービスを考える。あるいは運営のアプローチを考える、というのが公正性だと思っます。

アメリカでも、その考え方を実際にどういう形で具現化するのかというと、なかなか難しいのですが、まずは概念として公平なスタンスではなくて、どうやれば格差をなくせるのかというところに頭をスイッチする、考え方を切り替えるところから始めるしかないと思っます。

岩崎…日本においても格差が

拡大していることが指摘される中で、行政はその現実や実態を直視し、そこから始めるということでしょうか。

西芝…そうですね。公正性を考えるのであれば、どこにどのような格差があつて、どうやれば格差を縮めることができ、どうすれば結果として公正な結果がもたらされるかを考えるのが大事だと思っます。

岩崎…教育の世界でも70年代、80年代には公正性や社会正義が理念として言われてきました。90年代以降、人的資源開発を目的とする現実的で効率的な方向に重点がシフトしてきているように感じられます。

ような危惧を持ちますが、どのように公正性に依拠した行政サービスをを行うことができるかとお考えでしょうか。

西芝…大きな課題だとは思いますが、行政の場合、やったことに対する評価をしますよね。いわゆる行政評価。行政評価をする際の指標を効率性 (efficiency) と有効性 (effectiveness) の両方をきちんと押さえて考えることです。ついつい手っ取り早いので効率性だけを考えてしまうと、格差がますます広がってしまう可能性もあります。

どうやって効率的にサービスを提供するかということ、評価の基準にすると同時に、サービスをした結果どういう効果が誰に出ているのかということ、評価の基準にすることで、格差が少しずつ縮む政策、施策が考えられるようになるのではないかな：と思っます。



グループ振り返りの発表

●既存の考え方を覆すような大人の学び

岩崎…ありがとうございます。次に大人の学びについてお話を伺いたいと思います。

私はJaloGoMaに参加して、日本人の参加者にとって大人の学習機会として、大変良く企画され工夫されていると感じました。異なる経験を有する多様な職種の方たちとひとつのテーマで語り合う場をオンライン上で形成し、上手にスタッフがファシリテートしている、これはまさしく社会教育の発展的形態だと思います。

西芝先生は、ポートランド州立大学では、地域の人たちに社会課題を意識化させるために、どのようなプログラムを提供しているのでしょうか。

西芝…プログラムとしては、座学ではなくてフィールドで実際に応用ができるようなことを学んでもらうよう心掛けています。うちの場合、大学

院は、公務員になりたい人、NPOで働きたい人たち、あるいは都市計画をやっている人たち等、ほとんどが社会人で理論と実践を両方学んでいます。実際にフィールドに出て、地域の課題は何なのかということを見極めるということも分析力のひとつで、それいろいろな理論や文献などで学んだことをベースに解決方法を考えるというのがいわゆるコミュニケーションです。つまり、地域の課題を解決しながら学ぶというアプローチですね。

岩崎…コロナ禍の状況でJaloGoMaにはオンラインでの参加でしたので、現地でコミュニケーションがどのように行われているのか知ることができず残念です。例えば、以前ポートランドで実施したJaloGoMaで、現場に出て行く参加者がどのように変わっていくのか、そばで見ているお感じになる

ことはありましたか。例えば意識の上で変わり、さらに行動も変わったというような例などがあれば教えてください。

西芝…JaloGoMaのプログラムのインパクトは個々の事例を見て何かを学ぶというより、トータルとして何か自分の考え方が変わった、見たいな処にあるのかもしれない。例えば、福岡県久山町の職員時代にこのプログラムを受講し、最近町長さんになられた西村勝さんという方がおられます。JaloGoMaプログラムについてお話を伺う機会があったのですか、ご本人曰く、

「JaloGoMaのプログラムでは毎日いろんなところに行っている話を聞いて、いろんな人とディスカッションして、それで『うーん』と考えていた。JaloGoMaの最終日の振り返りのセッションで講師に質問されて、その質問に答えようとしている中で『あー、そうか』と目からうろこが落ち

るような気づきが得られた」という事です。

JaloGoMaでの学び、あるいは大人の学びというのは、単に事例を見て頭で分かるだけではなくて、いろんな新しいものに接触して、いろんなことを考えて、体験しながら、またディスカッションしながら既存の考え方を覆すような、価値観を覆すようなやり取りの中で学ぶことだと思えます。

JaloGoMaは、今は1週間なので、これを1週間でやるのは難しいのですが、できるだけそういう既存の考え方を覆してしまうような場面に遭遇してもらって、悩んでもらって、話し合いをしてもらって、そのプロセスの中で考えてもらいたいと思います。

岩崎…そうすると、それまでJaloGoMaの参加者が意識してこなかったと思われる問題をあえて意識してもらえようような場面設定を、西芝先生やス

タッフの方々が検討し提示するということでしょうか。

西芝…はい。そうだったことを念頭に入れてプログラムづくりをしていますね。学びが事例の理解の中で生じる場合

もあれば、いろんな人たちと話した後で、振り返りの時間の中で生じる場合もあります。私たちがディスカッションを進める場を設けるといっても大事なことで、事例の選択、振り返りをどういうふうにするか、プログラムをつくる上では全部を含めて考えています。

●飲み会ではなく「ビアストーミング」

岩崎…プログラムを考える上で、振り返りの適切なタイミングはありますか。また、ファシリテーターとして介入するときのポイントがありますか。

西芝…ポイントかどうか解らないですけど、JaloGoMaの場合は、実際にレクチャーを受けたり、事例を見学したりした後、その日のうちに、ディスカッションをし、振り返りをする時間を必ず設けています。そして、1日置きく

らいに、我々スタッフがファシリテートして振り返ります。また、ファシリテートしない、ビール飲みながらみんなとあってもないこうでもないという中にスタッフが入って、「でも、こうなんじゃない？」とディスカッションをする時間も混ぜています。

岩崎…プログラムとしてのフォーマルな場面だけではなくて、ビールを飲みながらディスカッションをするといったインフォーマルな場面が併せて有効だということでしょうか。

西芝…実は我々のスタッフの1人がインフォーマルな場面を、ビアストーミングと名付けました。当初、フォーマルな場面だとみんなかしまつてしまつて自由な意見が出ないから、終わってビール飲みながら話をするような場面を設けますということで、飲み会みたいな感じでセットアップしました。そうすると飲み会は飲み会になつてしまつて、

いわゆる振り返りにならない。

飲みながらきちんとディスカッションしてもらうには、どうやってやったらいいか考えて、名前を『ビアストーミング』とすることで、ビールを飲むだけではなくて、ブレインストーミングする場ですよというフレーミングができるじゃないですか。『ビアストーミング』をしますというのと、やっぱり話し合いのやり方が違つてきますね。

岩崎…どんなふうに違いますか。

西芝…きちんと今日学んだことを話す。飲み会だとダジャレを言ったりして楽しく時間を過ごすことがメインになりますが、ビアストーミングにすると、今日学んだことを話しましょうみたいな感覚でみんな来ますね。

岩崎…ビアストーミングというネーミングも良いですが、その試み自体も面白いですね。

●自分の意見を言うトレーニングを

岩崎…最後に、アメリカから日本の社会を見て、行政や大



自転車でポートランドの市内探索をした際のグループ写真

会的課題に目を向けさせ意識化させていこうとするとき、日本で足りない点は何だと思われませんか。アメリカと比較すると、日本の社会にどのような働き掛けをしていったらより良くなると思われませんか。

西芝…難しいですね。やつぱり子どものときから、何が正しいか、何が間違っているかということだけではなくて、自分が何を考えているかをきちんと話せるような教育をしておくことが大事だと思います。

過去に、日本人の大学院生2人ほどの指導教官をしたことがあるのですが、2人ともがアメリカの大学院で授業を受けて、「自分は何も考えていないわけじゃないんだけど、先生に『あなたはどうか思う？』と聞かれたときに、すぐ返事ができない。『アメリカ人の学生は、あなたはどうか思う？』と聞かれると必ず自分はどう思うということをちや

んと言う」と言っていました。

彼らは、日本では自分の考えを説明するよりも、正しい答えを出す事が大事だというような教育を受けてきたように思うと言っていました。正しい答えが出来る事はそれなりに大事だと思いますが、自分はどう考えているかということを引きちんと言えるトレーニングの場づくり。それを言ったからダメというのではなくて、「あなたはそういう考え方ね」ということを周りがちゃんと受けとめてあげるような場づくり。その2つがないと社会問題に目を向けなさいと言ってもなかなか出来ないのではないのでしょうか？

岩崎…そういつた教育を受けた大人から構成されている日本の社会を変えるために、大人になってから西芝先生のおっしゃるような教育を行うことは難しいでしょうか。

西芝…今からやるのであれば、全ての教育プロセスの中で、

そういうことができるようなトレーニングを、それぞれのレベルに合わせて考える必要があると思います。子どものときから積み上げていく事も大事ですが、大人になってもそれなりに大人のやり取りの中で、あなたは何を考えているのか言えるトレーニングはやれると思います。

岩崎…それには社会教育は有効だと思いますか。

西芝…有効だと思いますよ。ただ、あなたは何を考えているか言いなさいと言っておきながら先生が「何だ、そんなばかなこと言ってる」というように批判してしまったらダメですけどね(笑)

岩崎…そうですね(笑)

近藤…最後に本質的なところで、まさに他人の意見をちゃんと聞いて、自分の意見を持って発言すること、に尽きるのではないかと思います。本当に今日は貴重な時間をありがとうございました。